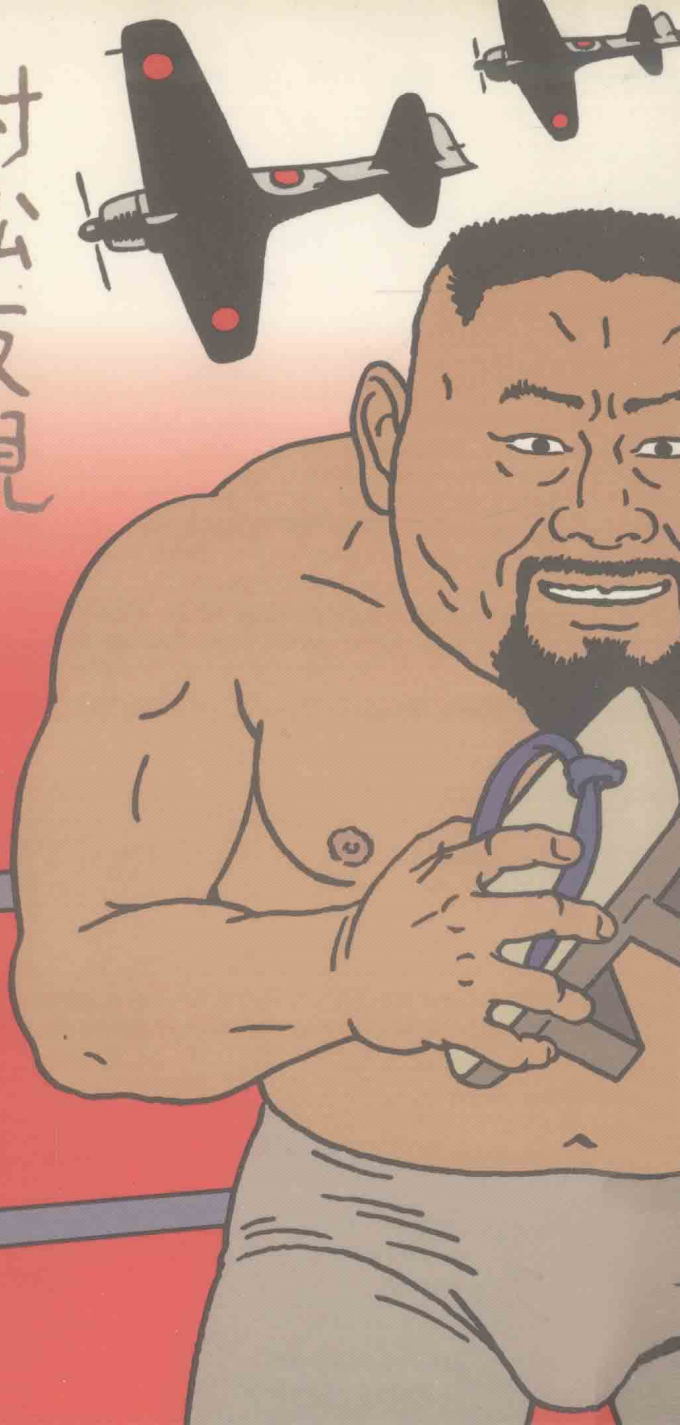
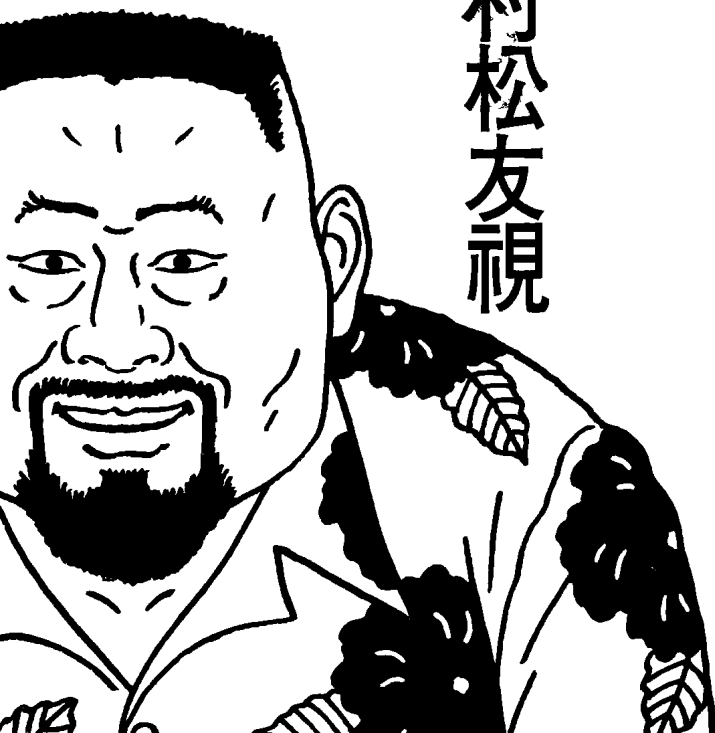


村松友視

七人のトローゴー



七人のトローゴー ● 村松友視



七人のトীগー

昭和五十七年九月一日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 村松友視

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三  
電話(〇三)二六五・一二二一

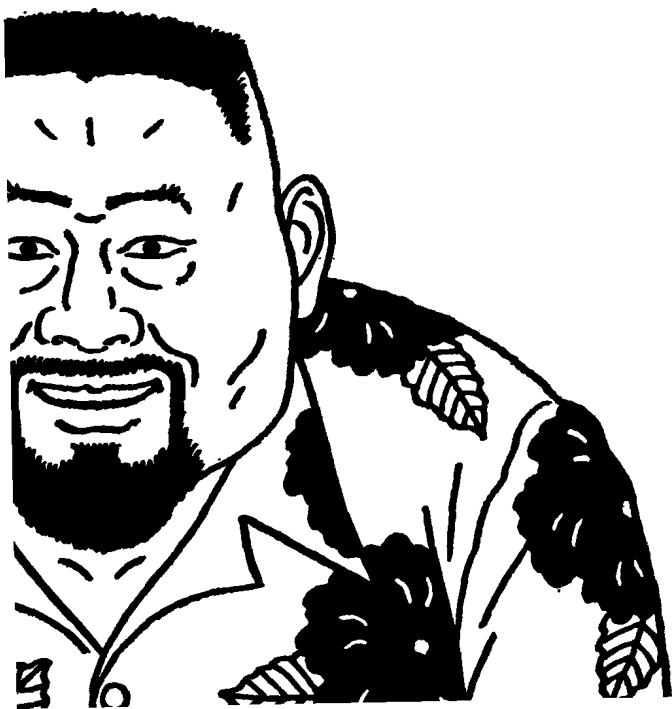
印刷 大日本印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は  
お取替え致します

© Tomomi Muramatsu 1982

Printed in Japan



七人のトイ・ゴール・目次



|            |     |
|------------|-----|
| 覆面剥ぎマッチ    | 5   |
| セメントの世界    | 39  |
| 七人のトーゴ     | 73  |
| クレイジー・タイガー | 141 |
| 奈落の案内人     | 169 |
| ひとりぼっちのツアー | 197 |
| あとがき       | 226 |

装幀 佐伯俊男

覆面剝ぎマッ  
チ

足ばやにゆく人群れをぬって遡行<sup>そこう</sup>してくる男たちがいる。よく見ると、彼らは遡行しているのではなく、人の流れと逆方向をむいて立っているのだった。通りすぎる人の肩口のあたりへ目を走らせ、低い声で何やら語りかける。声をかけるといふほどはつきりとした口調ではなく、囁き<sup>ささや</sup>かけるのともすこしちがう。肩口をかくく撫でるような声音だ。ある者はジャンパーを羽織り、ある者は三ツ揃いを着こなし、ある者はオーバー・コートに身をつつんでいる。

急ぎ足的人群れはおおむね男たちをよけながら進んでいった。犯人を追う刑事と刑事に追われる犯人の両方にただよう匂いが、男たちの目配りやポーズに表われていた。ドスをきかせた態度

を示しながら、終始なにかに怯えているような気配があるのだ。ここへやってくるたびに目にする数人のダフ屋の猫の目のようにかわる表情の裏側を想像しながら、アキラはポケットの中の切符をズボンの上から探った。

「どう？ リングサイドあるよ、リングサイド」

自分の肩口へ声をかけた男に、アキラはポケットから取り出した切符を定期券のように示して通りすぎた。男は無表情でアキラを見送り、

「余った券買うよ、余った券」

誰にともなく呟くように言った。余った券を買い、それを券のない者に売りつける。興行主からも警察からも監視され、そのどちらとも密約が成り立っているかのような不思議な連中だ。彼らは強い存在なのだろうか弱い存在なのだろうか、いつもと同じ思いを頭に貼りつかせて、アキラはプロレス会場の入口を通りぬけた。

バンフレットを買い、タオル、Tシャツ、トレーナーなどの売場をのぞき込み、便所へ寄ってからアキラは場内へ入った。試合開始までにはまだ十五分あまり、場内は六分の入りというところだ。二階の一番前へ陣取ると、リング上でトレーニングをつづける若手レスラーがいい角度で眺められた。やがて、若手レスラーがリングから消え、場内の照明がやや暗くなり、リングを照らすライトがつけられた。暗い場内のまんなかに、青いマットが浮び上った。

へ試合展開のルツボの中に身をおくというのではなく、プロレス試合のあらゆる局面を観察する

のに恰好な座席は二階の一番前だ。試合を間近に見られないという難点は、遠景をも自在にクローズ・アップさせる人間の眼を駆使することで解決する。そのためには、一度坐った席を絶対に移動しないこと、つまりフレームを固定させることが肝要だ。自分の席までクローズ・アップしてくるレスラーの匂いの強さを公平に受けとめ、どのレスラーの匂いが一番強くどいてくるかを味わうのである。

シヨルダー・バッグから取り出した朝比奈のノートに書き記された独特の思い入れのある文章に目をやって、アキラは軽い舌打ちを放った。

そのとき、前座試合の開始をつけるゴングが打ち鳴らされ、ざわついた場内に慄然とした表情を向けて、ガウンもつけない前座レスラーがリングに駆けあがった。だが、観客たちのほとんどはリングには目を向けず、パンフレットに記された「本日の試合予定」を指で追ったり、連れの者と来る路々の話のつづきをしたり、買ってきたプロレス・トレーナーのサイズを点検したりしている。そんな雰囲気我先刻承知といったふうに無視し、前座レスラーはコーナーのロープを手でしごいて試合開始のゴングを待っている。

へ前座レスラーはキャバレーの歌手と似た役割を背負わされている。酒を飲み女の肩に腕を回し愚にもつかないジョークを無理矢理に弾ませ嬌声渦巻く客の前に登場し、誰も聞こうとしない歌を歌うキャバレー歌手。彼らはこんな悲しい環境の中のなぐさみ物なのだが、すべてのスーパースターはここからスタートする。マラソンのスタート・ラインに密集するランナーの中から

誰がトップ・グループに飛び出すか、前座レスラーの試合はそんな楽しみで味わうべき世界である。したがって……

朝比奈のノートをそこまで読みすすめたとき第一試合開始のゴングが鳴った。そして、青く照らし出されたリングの上に、朝比奈と麻美の顔が交互に浮んで消えた。

朝比奈と麻美、そしてアキラの三人は、ガリ版でプロレスの同人雑誌「ラディカル・メッセージ」を編集している仲間である。編集長は四十歳の朝比奈、三十歳のアキラが記者、二十五歳の麻美はイラストレーションを担当するというのが「ラディカル・メッセージ」の役割だ。

「プロレスのファンクラブ雑誌が二百いくつあるというプロレス・ブームらしいけど、平均年齢では断然群をぬいてるだろうな、ちょっと不気味な高年齢だぜ、俺たち。でもまあ、不気味さこそプロレスを支える大きな要素でありましてね」

朝比奈はそう言って苦笑する。朝比奈は広告代理店に勤務しているというが詳しいことは分らない。「ラディカル・メッセージ」の取材費である切符代やタクシー代、印刷代などの諸経費はすべて朝比奈が出しているのだから、けっこう羽ぶりよくやっているのだろうというのが麻美とアキラの感想だ。

麻美はどこかの劇団に所属する女優だというが、朝比奈もアキラも麻美の名前を女優の名として耳にしたことはない。

「これでも一座の主演女優なんだから」

そう言つて麻美が片手で髪をいじり片手を股の外側に当てる古臭いポーズをとつても、その軀からだぜんたいに痛い感じがまわりついて、艶っぽさはにじみ出てこない。

「広告代理店の俺とだね、ルポライターのアキラが知らないんだから、女優だったって名もない小さな劇団なんだろうな。俺、そういうの好きだけどね」

麻美がトイレへ立ったすきに、朝比奈がそんなことを言つて片目をつぶつて見せたことがあつた。

アキラはルポライターとはいつても、教育雑誌の中の、僻地の教師の生活を浮彫りにする記事などの取材が多いのだが、朝比奈は勝手に芸能ルポライターと決めているようなのだ。つまり、三人はそれぞれについて何も知らないに等しい関係なのである。三人が知り合つたのは、三人が出会つて以来「ラディカル・メッセージ」の打ち合わせ場所となつているスナックKだった。

「あたしね、アマリロなんていうテキサス訛りの強いところの大学へ留学しちゃったもんだから、困るのよね、ダサイ英語がぬけなくて……」

カウンターに突つ伏してひとりごとのように喋つてゐる麻美の「アマリロ」という言葉に、アキラと朝比奈が同時に反応した。テキサス州アマリロというのは、プロレス・ファンにだけに強い意味をもつ場所だ。かつてNWA世界チャンピオンであつた兄のドリー・ファンク・ジュニアと、少年ファンのアイドルでもあり一度はNWAベルトを腰に巻いたこともある弟のテリー・ファンク、日本のマットに馴染みの深い「ファンクス」と呼ばれる人気兄弟の本拠地がテキサス州

アマリロというわけだ。

「アマリロって、あのファンク兄弟の……」

アキラと朝比奈は、麻美の言葉に対して同じ言葉を発した。麻美の暗い表情に一瞬、光がさした。そして三人はすっかり意気投合し、その夜のうちに「ラディカル・メッセージ」の刊行が決定したのだった。アキラは、プロレス新聞を毎日買っている程度のただのプロレス・ファンだが、朝比奈と麻美はそれぞれまったく違った関わり方ながらプロレス・ファンという域を越えている感じがあった。

テリー・ファンクの熱狂的なファンだという麻美は、彼に会うのが目的でアマリロへ留学したというのだ。それがプロレス・ブームとやらがやってくる二、三年前のことだから、麻美のプロレスへの熱狂はちょっと特殊といえるだろう。

「いくらプロレスが好きだっていったって、それで留学の場所を決めちゃうってのもねえ」

朝比奈はあきれ顔をつくった。彼は本当は留学の話自体が眉唾ものだと思っている。四十歳のプロレス・ファンという当の朝比奈はもっと不思議な存在だとアキラは思っている。四十歳のプロレス・ファンということ自体がすでに特異だが、その思い入れの激しい関わり方が大袈裟で奇妙なのだ。三人が二度目に会ったとき、朝比奈は部厚いノートを数冊かかえてスナックKにやってきた。

そのノートには細かい字の横書きで、びっしりとプロレス哲学めいた内容が書き記されていたのだ。その論旨は、世間から蔑視されるプロレスに脚光を与え、プロレスを蔑視する世間の目を逆

に蔑視しようというアジェーションにつらぬかれていた。何ゆえに朝比奈がそのような角度を世間に対して持つようになったか、それは今だに謎のままだ。だが、現代ビジネスの真只中にある広告代理店に勤務するいい年をした大人が、プロレス熱狂少年まがいの知識を駆使して、ノート何冊にもわたる文章を綴っているのはアキラの興味をひいた。

「ラディカル・メッセージ」の内容は、当然のこととして朝比奈の考えを打ち出してゆくことになった。アキラと麻美は、もともとこれといった考えをもってプロレスに接していたわけではないから、そのことに対する抵抗感はなかった。スナックKに朝比奈が置いた「ラディカル・メッセージ」と書いたボトルをいつ飲んでもいいということ、四、五千円から一万円もするプロレスの入場券の代金を朝比奈が面倒をみてくれること、この二つのルールがアキラと麻美にとってはメリットだった。打ち合わせ場所のスナックKで週に一度の編集会議をやり、出来るかぎり月刊のペースを守ることを確認、「ラディカル・メッセージ」編集部はスタートしたのだった――。

リング上では三人の若手レスラーが箒でマットを掃いている。メイン・イベントの開始前、マットの調整のため五分間の休憩となっていたのだ。腕時計の針が八時八分前を指しているから、テレビ中継のための時間調整だろう。リング上のあかりがやや暗くなり、場内に雑然とした雰囲気のみなぎった。便所へ立つ者、このときとばかり間近に寄ってリングを見ようとする少年たち、見やすい空席へと移動する観客などによって、場内の景色全体がゆれうごいた。

メイン・イベントは覆面レスラー同士の「覆面世界一決定戦」だ。レスラーは二人ともメキシ

コ人であり、どちらも花形の善玉と悪玉だ。パンフレットには、この試合が「覆面剥ぎマッチ」であると発表されている。

「覆面剥ぎマッチ」は、覆面の剥ぎ合いをするという試合形式ではない。試合に敗れた側が覆面を剥がされ、観客の前に素顔を暴<sup>さら</sup>さなければならぬというルールの試合である。試合中に相手の覆面を剥いでしまうことは、汚い手とかいいう問題ではなく、商売上のルールとして禁じ手となっている。これは、素顔を隠して仮面をつけて金を稼ぐ者同士の、いわば「暗黙の了解」なのだ。

メイン・イベントの開始を待ちながら試合展開に思いを巡らしていたアキラは、「ラディカル・メッセージ」を十号も一緒にやってきた時間が、自分のプロレスの見方を朝比奈そっくりにさせていることに気づいた。朝比奈のノートの中に綴られた文章が自分のもののように感じられるのは、ルポライターという職業とかかわっていることだろう。一夜づけはおろか、喫茶店で荒読みした資料をもとに人をたずねることは、職業柄よく経験することだ。資料の内容と自分との距離に神経質であつては、アキラの商売は先へ進むことができないというものだ。だが、それにしても朝比奈のノートは自分の軀の中へ浸透しすぎている……そう思つて眉を寄せたとき、リングが急に煌々たるライトに照らし出された。いよいよ、本日のメイン・イベント、時間無制限一本勝負の開始だ。

ゴングが三つ打ち鳴らされると、場内のあかりが消され、ライトに照らされた青いリングだけが宙に浮いたように見えた。と見るまに、リング上の照明も消え、場内が闇につつまれた。やが

て、サーチライトが天井に向けられ、心にくいタイミングで青コーナーにふられた。大歓声が始った。青コーナーにはまだ誰も姿を現わしたわけではないが、そこからまず悪玉が登場してくることを予知したどよめきだ。

「フライング・ヘッド」というロックの曲が流れ、どよめきが大きくなった。「フライング・ヘッド」は、悪玉の得意技の名をとって作曲された曲であり、彼の登場にはいつもこの音楽が流れる。サーチライトに照らされた人影の中に光るものがゆれている。悪玉のもつサーベルがサーチライトを射返しているのだった。

サーベルをふり回したり口にくわえたりして見得を切り、人を押しのけ蹴散らしながら、悪玉はたつぷりと時間をかけて花道を進んでくる。ロープ最上段を飛び越してリングに舞い降りた悪玉は、銀色の覆面をつけ銀色のガウンをまとっていた。リング上で観客の目に捉えられるものは、サーチライトを射返す銀色だけだった。

サーチライトがいったん天井を照らし、観客の気分を玩もてあそぶように時間をかけてから、大きく弧を描いて赤コーナーにふられた。前にもまして大きな歓声が湧き起った。善玉は悪玉よりさらに派手な登場ぶりだった。

ゆれうごく人影よりも一段高いところに善玉の姿が見えた。それは、善玉が少年たちの肩にかつがれているためだった。金色の縁どりをした緑色のラメの覆面をつけ、背中に祭と赤く染めぬいたハッピを羽織り、火消ひきよ繩を頭上でぐるぐる回しながら花道からの登場だ。